



第 63 号

目 次

論 文

- 近世奈良町の号所……………水谷 友紀(1)
 コンスタンティヌスとキリスト教……………新田 一郎(25)
 ——対マクセンティウス戦を中心に——
 土地計画入植一五〇周年とその後のチャーティズム研究……………古賀 秀男(41)
 地名からみたロシア……………中村 泰三(61)

史料紹介

- 下鴨社家日記紙背文書目録……………下鴨社家日記研究会(69)

載 録

- 新田一郎教授 略年譜・著作目録……………(123)
 古賀秀男教授 略年譜・著作目録……………(129)
 中村泰三教授 略年譜・著作目録……………(135)
 追悼 奥村容子さん……………(145)

- 楽 報……………(153)

2 0 0 6 ・ 2

京 都 女 子 大 学 史 学 会

表紙の題字は故那波利貞先生の筆。『史窓』
が活版印刷になり第5・6合併号を発行した
とき（昭和29年）御書きいただいたものです。

二〇〇五年度 学会行事

新入生歓迎会

四月四日(月) 新入生オリエンテーション
午後から始まった学科ごとのオリエンテーションで、新入生と先生方および史学会委員との顔合わせが行われました。はじめに先生方に自己紹介を行っていただきました。史学科の先生が初めて一堂に会するというところで緊張・興奮・期待と新入生の思いも様々であったことでしょう。出身地や専攻などのお話の時よりどっと笑いも起りややかな鬱陶気となりました。その後学会委員から自己紹介と史学会についての説明、また二日後に迫ったパスツァーの諸注意を行いました。併せて単位取得や授業選択に関する質問会を開きました。授業とサークルの両立の仕方など学会委員も知りたい質問も飛び出しました。その中でもやはり資格取得に関する質問が多く、それはオリエンテーション後、学生研究室が新入生で埋まるほどでした。そのことに私たちは嬉しく思うと同時に、大学生活が彼女たちにとってかけがえのない日々になればと思えました。

新入生歓迎パスツァー

四月六日(水) 大原・三千院へ
毎年先生方と史学会委員、そして新入生同士の親睦を深めるために史学会でパスツァーを企画しています。今年は大原・三千院へ行きました。前年度までは昼休みに先生方を交えての昼食会を開いていましたが、本年度は時間が設けられず集合後すぐに西本願寺へ向かいました。移動中、新入生は史学科だけが西本願寺へバス移動しているという話を聞き、少々優越感に浸っていたようです。

西本願寺での参拝を終えた後、昼食をとり目的的地方である大原・三千院を目指しました。その間、新入生の自己紹介が行われました。歴史に興味を持った

きっかけや希望する専攻など早くも彼女たちの意気込みが感じられました。

四月にも拘わらず肌寒く、桜もちらほら咲きで心配していたのですが、当日は汗ばむほどの陽気に包まれました。これも彼女たちの若い力のおかげなのかもしれません。桜は満開とまではいきませんが、代わりにはやくなげや新緑を觀賞することができました。短い時間ではありましたが自由に散策し、思い思いに大原の地を楽しむことができたのではないのでしょうか。

帰りのバスでは新入生たちはすっかり打ち解けた様子でした。いつの日かまた大原へ行った時に今日の事を思い出してもらえればと思います。その後予定通りに学校へ戻ることができました。先生方、新入生の皆さん、ご協力いただきありがとうございました。

春季公開講座

五月二十日(金) J三二〇教室にて
雑誌『平和』をめぐる人々
―「日本平和会」の新史料とともに―

魏源と『海国図志』 本学教授 坂口 満宏氏
鹿児島大学名誉教授 大谷 敏夫氏

卒業論文中間発表会

日本史専攻 十月十二日(水) 十四日(金)
東洋史専攻 十月十三日(木) 十五日(土)
西洋史専攻 十月十一日(火) 十三日(木)

秋季公開講座

十一月十八日(金) J三二〇教室にて
女性史からみたチャイニスト運動 本学教授 古賀 秀男氏
近代京都観光と歴史学 京都府立大学名誉教授 井口 和起氏

一回生専攻分け説明会

十二月一日(木) J三二〇教室にて
当日の昼休みに、二回生に向けての専攻分け説明会が行われました。「二回生になるなんて早すぎる」「どの専攻にしよう」などの声が聞こえる中、先生方の説明が始まりました。一回生は一度きりで自分の専攻が決まるとしつかり理解していたようで、説明を聞く姿も真剣でした。厳しいお言葉や魅力的なお話に迷った人も多かったようです。質問会は時間の都合上聞くことができませんが、専攻を決定するにあたり、自らを振り返る良い機会になったのではないかと思います。

卒業生予餞会

十二月二十日(火)
午後六時より恒例の予餞会が行われました。この日は四回生の卒業論文提出の締切日でもありました。本年度は「清水寺 順正」にお世話になり、先生方をはじめ四回生の方々には多数ご参加いただきました。

論文完成にはこれまで多くの時間と労力を費やしてこられたことでしょう。さぞお疲れかと思いましたが、その心配を吹き飛ばすかのように会場は先輩方の笑い熱気がいっぱいになりました。日頃から論文を書き上げるために研究されている姿を拝見していたので、先輩方が無事に提出されたことを嬉しく思いました。ここに至るまで努力されたことは、これから歩まれる人生で自信となることでしょう。先輩方の今後のご活躍を心より祈っています。

早春の学会旅行

三月二十九日(水)
世界文化遺産の姫路城や姫路周辺、そして聖徳太子生誕の地といわれる太子町をめぐる日帰りの旅を企画しています。行き先は近場ではありませんが、普段は行かないような史学科ならではの場所を観光して回りたいと思っています。前年度までは一泊旅行でしたが、より多くの皆さんに参加していただき

くアンケートを実施し、その結果を基に、今回の日帰りバスツアーが決定しました。学会旅行では史跡をめぐることは勿論、回生の枠を超え交流することができます。また先生方の新たな一面も見ることが出来ます。一年に一度の旅行なので、皆さんと楽しい時間を過ごせたらと思います。(永田かがり)

二〇〇五年度 史学科講義題目

史学科共通

講義

史学研究入門A
史学研究入門B
日本史概論A
日本史概論B
東洋史概論A
東洋史概論B
西洋史概論A
西洋史概論B
考古学
民俗学
日本美術史
東洋美術史
西洋美術史
歴史地理学
人文地理学
自然地理学
地誌学

常松教授
柴田教授・谷口助教
瀧浪教授
坂口教授
松井教授
檀上教授
新田教授
常松教授
梶川講師
根井講師
山本講師
竹浪講師

愛宕助教
中村教授
中村教授
相馬講師
中村教授

谷口助教
植松教授・保科・井上講師
新田教授

常松・柴田・檀上・瀧浪・植松教授・母利助教
松井・新田・稲本・古賀・坂口教授・谷口助教

史学外書講読I
漢文
ラテン語

史学基礎演習A
史学基礎演習B

史学基礎演習A
史学基礎演習B

史学基礎演習A
史学基礎演習B

史学基礎演習A
史学基礎演習B

日本史専攻

特講

古代宮廷社会と貴族
中世に生きた人々
譜代大名井伊直弼の思想形成と政治行動

動

近代日本の平和運動を考える
近代日本の植民地移住体験を考える
近世のパスポート体制
日本文化の歴史

講義

日本史講読I
日本史講読II
日本古文書

柴田教授・高井講師
瀧浪・稲本教授・吉住講師
稲本教授・母利助教・中山講師

演習

日本史演習I
日本史演習II
瀧浪・稲本・柴田・坂口教授・母利助教
瀧浪・稲本・柴田・坂口教授・母利助教

東洋史専攻

特講

中国史における少数民族問題
朝鮮古代史を考える
古代東北アジア史を考える
イスラーム時代西アジア政治史
イスラーム時代シリアの諸都市

植松教授
田中講師
田中講師
谷口助教
谷口助教
木田講師

清代中期史学史―錢大昕を中心に―
清代中期史学史―正史と歴史地理の学問―
出土文字史料による中国古代史の再構成

木田講師
木田講師
松井教授
松井教授
富谷講師

周代史の再構成
中国史上の諸問題

周代史の再構成
中国史上の諸問題

周代史の再構成
中国史上の諸問題

東洋史講読II
東洋史講読III

富谷・岡本講師
松井教授・井上講師

東洋史演習I
東洋史演習II

松井・植松・檀上教授・谷口助教
松井・植松・檀上教授・谷口助教

東洋史演習II

東洋史演習II

アメリカにおける飲酒と禁酒運動
アメリカにおける禁酒法の展開
ローマ帝国の皇帝崇拜に関する考察
コンスタンティヌス帝とキリスト教
イングランド中世政治史―アングロ・サクソン時代からマグナ・カルタまで―

常松教授
常松教授
新田教授
新田教授

特講

イングランド中世政治史―ヘンリ三世
治世から百年戦争まで―
十九世紀フランスの教育と宗教
フランス第三共和政初期の教育と社会
十九世紀初期「アイルランド問題」の展開

朝治講師
朝治講師
上垣講師
上垣講師
古賀教授

合同法撤廃運動とアイルランド・ナショナルリズム
バルカン地域の東西文化交流
中央アジア、ユーラシア東北部の東西文化交流

古賀教授
古賀教授
中村教授
中村教授

西洋史講読I
西洋史講読II
西洋史講読III

古賀・常松教授
青木講師
青木講師
轟木講師

西洋史演習I
西洋史演習II
西洋史演習III

新田・古賀・常松教授
新田・古賀・常松教授

新田・古賀・常松教授
新田・古賀・常松教授

新田・古賀・常松教授
新田・古賀・常松教授

担当者が前後期それぞれ別の題目を掲げている場合は、前期・後期の順に掲載し、科目名とA・Bの記号は省略した。

二〇〇五年度 卒業論文題目

日本史専攻

- 有本 裕美 文政六年紀州紀ノ川筋一揆の一視点
- 粟佐 紫乃 声聞師考
- 飯島理恵子 直弧文の意義に関する一考察
- 飯村 恵美 『梅若実日記』を読む―能楽復興をめぐる―
- 井口由美子 吉田茂とマッカーサー
- 池本のぞみ 正倉院宝物と光明皇后
- 一ノ谷 渚 熊野三山信仰と熊野比丘尼―比丘尼の果たした社会的役割―
- 泉 結香子 大谷吉継について
- 犬塚 理沙 武家思想と武士思想―赤穂事件を事例として―
- 岩崎 希美 伊藤慎蔵―歴史の表舞台に出る機会を逃した男―
- 岩下美奈子 北野社創建考
- 宇津木留理 近世の褒賞制度にみる領主側の意図
- 江野澤まゆ 上総請西藩主林忠崇の「脱藩」
- 大石 江美 継体天皇
- 大内彩記子 中世前期武家社会における後家
- 大川 朋子 死ぬ事を見付ける武士の死生観―近世武士道書『葉隠』を中心に―
- 大川 瑞穂 元正天皇即位事情について
- 大下加奈子 春日局―三代將軍家光を育てた女―
- 大西 香菜 北条氏の政権掌握過程の研究―時政・義時の時代を中心に―
- 岡田 知春 八世紀の外交政策―新羅から渤海への転換―
- 岡田美和子 渡辺党と惣官職―海と武士団の関係―
- 岡野真理子 奥州藤原氏の権力から考える―秀衡は何故義経を匿ったのか―
- 奥田 結衣 異類女房譚の変化―浦島説話と狐女

房―
長部 夏美 軍人山本五十六の日米開戦―海軍次官から連合艦隊司令長官まで―

小野今日子 院政期における女院

加藤 啓子 葛城氏の衰退と雄略期

亀田 由子 「遊女」の成立

亀山 真実 戦後日本における社交ダンス文化の発展―ダンスホール―の繁栄と衰退―

唐池 敦子 ひめゆり―沖縄戦―

北岡佐知子 広田弘毅と極東軍事裁判―国際検察局調査から見る―

木俣 智代 平安後期から鎌倉時代における遊女

呉松 優香 淀殿―その呼称と悪女説の関係―

桑原あかね 大友皇子即位の考察

桑原 絵美 平正盛と平氏政権

河野比沙子 天皇機関説事件とその歴史的意義

小林 仁美 近世寺子屋の事例―近江国「時習齋」を中心にして―

坂本 純子 宮城十二門について―氏族名門号の由来―

進登 美香 禁色とゆるし色

杉浦 佳美 宝曆・明和期の田沼意次権力について

住田ゆりな 『日本書紀』の編纂について

立花 美香 伊豆北条氏存在形態について―時政を中心にして―

多原 裕美 女院の創出

塚腰 博子 安和の変―空白の十年―

伝田 未来 戦後、女性が強くなりえたか―「婦人公論」にみる働く女性―

津國 智里 江戸時代の庶民の旅―飯盛女と講のかかり―

塚本 暁子 中近世移行期における小田原城

辻 由起子 楠木正成はなぜ後醍醐天皇と出会ったのか―正成の正体を探る―

津村友梨子 幕末宇和島藩における庶民の動向

手島 一恵 会津藩寛政期改革における藩校設立の意義―殖産興業との関連性を探る―

富田 貴子 慶喜の政治構想―開国と改革について―

永田 佳奈 道成寺に伝わる藤原宮子の伝説について

西田 淳子 四国遍路―弘法大師信仰と接待―

中嶋 若菜 皇極の讓位と乙巳の変

橋場 可奈 日本における婚姻形態―平安貴族を中心に―

花森 裕子 時事新報にみる福沢諭吉の朝鮮観

濱崎 亜美 箱館戦争における榎本政権の実態

林 紗知子 藤原氏と平等院

原 利佳 近世の小袖―寛文小袖にあらわれた近世初期―

桧垣 美佳 近世における鷹場の拝領

弘瀬 麻美 彰子立后の背景とその意義

福寿 雅子 平安貴族を通してみる鬼の姿―出現場所―

藤井 仁美 古代出雲服属過程

藤本 杏子 映画法廷生―雑誌「日本映画」の果たした役割―

藤本 理恵 武士の男色―事例分類の再検討―

古川百合香 サプリメントの必要性

古谷 知紗 鎌倉後期朝廷訴訟制度の発展

前田 真美 藤原彰子の国母像

松井 佳織 日本的経営―鐘紡のケーススタディー―

丸山 綾香 松本藩千国街道における輸送連携―塩と肴の移入をめぐる中馬の活躍―

水口真由子 江戸の食物商売

宮田 有希 播磨国風土記における揖保川流域の里

三善 沙織 状態と伊和大神についての一考察

森岡 慶江 菅原道真の配流

山川 素直 率分関と内蔵寮―山科家礼記を参考に―

山崎 幸子 浄土信仰―平安期を中心に―

山地 里枝 明治初期の京都の小学校―会所兼小学校の存在について―

山田 千枝 古代の皇位継承について

荒木村重の謀叛―その原因・意志を探る―

る―

報

奥田 結衣 異類女房譚の変化―浦島説話と狐女

富田 貴子 慶喜の政治構想―開国と改革について―

山田 千枝 古代の皇位継承について

横田 瞳 近江浅井氏—その権力と地位—
吉岩 朋香 桃山期から江戸期における服飾色彩の
変化—洛中洛外図屏風の考察をもと
に—

吉村 未来 藤原光明子—立后の意味—
米田 彩加 丹波国における幕府領優先主義の検証
—『御仕置例類集』にみる—
余村 貴子 稱荷信仰について—人々が求めていた
もの—

浦井 昌代 皇族同士の婚姻—天智・天武天皇とそ
の子の世代—

東洋史専攻

一場亜樹子 前漢中期の皇帝像—霍光を中心とし
て—
入江 恭子 FGM廃絶へ向けて—ケニアの女子割
礼論争を通して—

岩崎由香里 明末における奢侈の盛行とその意味
浦田 真美 北平—二九運動と中国学生救国連合会
の成立—学生から見た抗日統一戦
線—

大西久美子 唐宋時代における民間信仰の変化
大野みゆき 宰執と御史台—北宋神宗期を中心に—
小河原れみ 満州国の阿片専売権益をめぐる対立の
構図—関東軍・関東庁・在地勢力の
分析を通して—

尾崎 裕香 朝鮮戦争における日本特別掃海隊
川本 恵理 日清修好条規締結時に見られる李鴻章
の対日認識
菊田 成美 李朝初期における妓生の社会的特質に
ついて

木下 絵里 曹魏と都督
木本 麻希 十九世紀後半の日中関係と黄遵憲
栗原 梢 沖繩戦における朝鮮人軍夫—特設水上
勤務隊—
神村 安希 西周後期に見る周王像
小林 愛 女帝への道—則天武后とその後の女性
たち—

小林 雅美 イルハン朝期イランの都市—『ラシー
ド区ワクフ文書』にみえるヤズド—
島谷 千枝 梁啓超の公・私観からみる「新民説」
下村真紀子 清朝の思想統制と『大義覺迷録』
杉本美由紀 サファヴィー朝期イランのシーア派化
とキジルバシの關係
田原 靖子 梁啓超の日本亡命と思想的転換
玉置 留衣 前漢初期の首都建設
寺田 雪江 高昌国王麴伯雅の改革
土居 永花 宋代の船戸について
土井 良子 政治家としての馬祖常
中辻 朝 二つの苗族—伝統と現代化の狭間—
長谷川真子 秦漢代の共犯と謀
畑山 法子 明代史上における宣徳時代の歴史的位
相—特に対外政策を通して—
東 夏美 キュルテベ文書から見たカニシュの勢
力

前川 敬子 南宋政權確立期における秦檜の位置
—特に和義と兵権回収の側面から—
前組 有紀 前漢武帝期の西域進出—対匈奴政策と
して—
松原 奈美 十四—十七世紀のティモール制—バル
カン地方を中心に—
村井 愛 清末—民初期における近代教育の普及
と地域社会の一考察—江蘇省川沙県
の場合—

山口華瑞奈 黄宗義と『明夷待訪録』—明の遺臣の
生涯と創作活動—
山本 慧子 明治期における華僑取締法と神戸華僑
の場

西洋史専攻

浅井麻利子 アメリカ合衆国における映画と移民の
關係
磯崎 愛 十九世紀アメリカ—移民制限に向け
て—
伊藤 弥生 アンテペルム期の南部と混血奴隷
犬飼 彩子 アメリカの自由—正義とベトナム戦争
江藤 祐子 十九世紀—パリ消費生活の成立

蛭原 敬 独立か死か—ブラジル独立運動—
岡崎 優美 神聖ローマ帝国の崩壊—オーストリア
帝国への転換期を中心に—
奥野 友郁 ロココ世界とボンパドゥール夫人
川口 優子 イタリア—ルネサンス期における芸術
家とパトロン
川畑 舞 フェルメール—その評価と贋作事件—
岸田 裕希 サンロドニ修道院とカペー王家
佐古 貴絵 中世ヨーロッパの売春婦について
芝本 淳子 ナチスの政權獲得と保守派エリート
杉嶋 千明 プロイセンにおけるドイツ騎士団国家
竹村 結子 紀元一世紀の属州ユダヤの社会
辻井 涼子 オリンピア競技—ギリシア世界におけ
る意義とその性格—
豊崎 美和 ポンペイにみる古代ローマ都市社会
萩本 恵理 オーストリア—ハンガリー—二重帝国
—アウスグライヒの成立とその影
響—
原戸 僚子 ユダヤ移民のアメリカ
樋口 綾 中世後期フイレンツェの支配体制
平井 蓉子 優生思想—近代知識人からナチズムま
で—
弘嶋 千裕 フランス植民地主義—「植民地帝国」の
建設者—ジュール・フェリー—
廣瀬さやか 十五世紀フイレンツェにおける捨児に
ついて
福岡 和美 コーヒー—ハウス—十七、十八世紀の
ロンドン—
松本麻衣子 トロツキズムの成立
水本 絢子 不滅の太陽神ミトラス信仰—ローマ帝
政期を中心に見て—
三宅 淑子 ミノア文明のくらし
村田 枝里 ウィーンとワルツの歴史について
山崎由紀子 北アイルランド問題—一九七〇年以降
の紛争激化から和平に向けて—
山田 紗希 オーストリア帝国の中のチェコ—独立
か連邦化か—
米村真理子 ヨーロッパにおけるコレットの歴史

二〇〇五年度 大学院文学研究科

史学専攻博士前期(修士) 課程講義題目

特論

古代都市形成論

平安京の研究

中世伊勢神宮領の研究

戦国期の社会

幕末期会津藩の政治動向

※近代日本の平和運動を考える

※近代日本の植民地移住体験を考える

『木戸孝允日記』を読む

近世のバースポーツ体制

※日本文化の歴史を考える

日本古文書学特論

中国古代理学特論

元代沿海地域社会の諸問題

明代沿海地域社会の諸問題

中国社会史特論

※中国史上の諸問題

※清代中期史学史―銭大昕を中心に―

問―

前近代アラブ地域のウラマー

イスラーム文化における口承の尊重

※バルカンにおける東西文化交流

※中央アジア・北東アジアの東西文化交流

流

キリスト教とローマ帝国

西洋古代における理想国家・理想的支配者像

※イングランド中世政治史―アングロ・サクソン時代からマグナ・カルタまで―

で―

※イングランド中世政治史―ヘンリ三世

治世から百年戦争まで―

産業革命期イギリスの民衆と政治

アメリカ現代政治史

アメリカ大衆社会論

※十九世紀フランスにおける教育と社会

(※は学部共通)

演習

日本史演習Ⅰ・Ⅱ

日本史演習Ⅲ・Ⅳ

日本史演習Ⅴ・Ⅵ

日本史演習Ⅶ・Ⅷ

日本史演習Ⅸ・Ⅹ

東洋史演習Ⅰ・Ⅱ

東洋史演習Ⅲ・Ⅳ

東洋史演習Ⅴ・Ⅵ

東洋史演習Ⅶ・Ⅷ

東洋史演習Ⅸ・Ⅹ

西洋史演習Ⅰ・Ⅱ

西洋史演習Ⅲ・Ⅳ

西洋史演習Ⅴ・Ⅵ

西洋史演習Ⅶ・Ⅷ

西洋史演習Ⅸ・Ⅹ

〔注〕特論については、題目が示されている科目は、題目を掲げ、示されていない場合は科目名を記した。同一担当者か前後期それぞれ別の題目を掲げている場合は、前期・後期の順に掲げた。その他は前後期共通。

史学専攻博士後期課程講義題目

特殊研究

日本史特殊研究Ⅰ

日本史特殊研究Ⅱ

日本史特殊研究Ⅲ

日本史特殊研究Ⅳ

日本史特殊研究Ⅴ

東洋史特殊研究Ⅰ

東洋史特殊研究Ⅱ

東洋史特殊研究Ⅲ

東洋史特殊研究Ⅳ

東洋史特殊研究Ⅴ

西洋史特殊研究Ⅰ

西洋史特殊研究Ⅱ

西洋史特殊研究Ⅲ

古賀教授

常松教授

常松教授

上垣講師

瀧浪教授

稲本教授

稲本教授

母利助教

柴田教授

坂口教授

松井教授

植松教授

植松教授

谷口助教

新田教授

古賀教授

常松教授

二〇〇五年度 大学院修士論文題目

加藤麻百合 明治初期の外国人対策―外国人殺傷事件と警備―

榎村 益香 近世における子どもの仲間関係―桑名日記を題材に―

村田 瑞穂 近代日本の「女給」像―カフェーと社会風俗―

鍋島多映子 漢代太傅考 (以上日本史)

小谷美記子 スコットランド宗教改革議会成立への道―親フランス政策からの転換―

西村 明子 ヤコブ・ヴァン・アルテヴェルデの改革とヘントの変容 (以上東洋史)

福池 弥生 サライエヴォ事件とセルビア・ナショナリズム―青年ボスニアと黒手組の役割― (以上西洋史)

二〇〇五年度 大学院行事

研究発表会・その他

四月 二八日 大学院歓迎会(虎連坊にて)

四月 二七日 定例研究会

明代対外政策にみる市舶太監の実像

漢代太傅考 M2 大川 沙織

ヤコブ・ヴァン・アルテヴェルデの活動とフランドル都市ヘント M2 鍋島多映子

セルビア帝国の記憶―セルビアナショナリズムの起源― M2 西村 明子

近代外交機構の形成―外国人殺傷事件を中心に― M2 榎村 益香

四月 二八日 近代外交機構の形成―外国人殺傷事件を中心に― M2 加藤麻百合

五月 十二日

- 近世における子どもの世界
M2 棚村 益香
戦間期のカフェーの変遷
M2 村田 瑞穂
定例研究会
和歌山とキリスト教―戦国時代から江戸時代初期までの和歌山キリスト教―
M1 井関 裕子
春日齋女についての一考察
M1 妹尾明日香
十市皇女の一考察
M1 平山 静香

七月 十二日

- 定例研究会
南米イエズス会士による先住民のキリスト教化
M1 今井 彩
プラトンの理想国家と古代ギリシア
M1 大幡 莉沙
青年アイルランド派とアイルランド・ナショナルリズム
M1 玉城 湖澄
抗日戦争期における中国知識人の救国運動
M1 田浦 惟子
唐代仏教と社会
M1 中西 梨恵
マテオ・リッチの中国布教適応方法
M1 沼尾 茜
平安時代の美女
M1 小森 麻澄

九月 十四日

- 定例研究会
「主四時」としての義和―前漢末にみえる儒家的世界観実現への試み―
D3 馬場理恵子
清代雲南における航路開発の軌跡―乾隆初年における金沙江開鑿工事を中心に―
D2 森永 恭代

修士論文中間発表会

九月 二十日

- 幕末の修陵事業―研究史と課題―
特別研修者 佐竹 朋子
藤原頼通をめぐる養子問題の課題と展望
D1 木本 久子
近代衛生と「都市計画」―京都市上下水道敷設論を中心に―
D1 吉川 美佐

九月 二一日

- 漢代太傅考
M2 鍋島多映子
ヘントの都市改革とヤコブ・ヴァン・アルテヴェルデ
M2 西村 明子
サライェヴォ事件
M2 福池 弥生
スコットランド宗教改革前夜―五六〇年以前の改革者と為政者の動向―
M2 小谷美記子
近代日本の「女給」像―カフェーと社会風俗―
M2 村田 瑞穂
近代外政機構の形成
M2 加藤麻百合
近世における子どもの仲間関係―桑名・柏崎日記を題材に―
M2 棚村 益香

領域別行事

日本史

七月 十五日

- 書評会
佐竹 朋子著「三条実万の思想形成について」
D1 吉川 美佐
川崎 理恵著「初期大雑書に関する書誌的考察―寛永から慶安四年まで―」
M1 妹尾明日香

研究室だより

京都女子大学史学科は、現在、十四人の教員と史学科事務員安井さんの総勢十五人で運営されています。昨年度、体調を崩し休職されていた竹内先生は復職され、アメリカでの研究を終えた坂口先生も無事帰国されましたので、本年度は、従来通りのスタッフで研究室が運営されていくこととなります。しかしながら、すでにご案内のとおり、本年度末をもって日本史学の稲本先生、西洋史学の古賀先生、新田先生、地理学の中村先生の四先生が御定年で退職されることとなっております。後任としては、日本史学、西洋史学の三先生をお迎えする予定ですが、地理学については残念ながら非常勤の先生に授業を担当いただくこととなり、史学科の教員数は一名減の十三人となってしまいます。博物館実習の巡回指導など、教員の負担は増加傾向にあり、今後、研究室の運営も益々厳しさを増していくものと懸念されます。

本年度、史学科は一四三名の新入生を迎えました。昨年末に専攻分属を決定しましたが、結果は日本史七六名、東洋史三五名、西洋史三十名となり、例年通り日本史の志望者が多く、東洋史と西洋史の志望者が抜きつ抜かれつといった状況が続いています。なお、二回生以上、及び大学院の在籍者数は、二回生 一四八名、三回生 一四一名、四回生 一五五名、五回生以上 九名
大学院、
博士前期課程 十七名
博士後期課程 五名
研修者 六名、特別研修者 二名

となり、史学科全体では大学生五九六名、大学院生・他三十名、合計六一二名の大所帯となっています。例年通り、十二月二十日を締め切りとして卒業論文一四八本が提出されました。今は製本を終え、共同研究室で試問の時を待っています。今後は製本を終え、そこにはもう一本論文が加わっていたはずですが、

京都女子大学史学会会則

(二〇〇三年三月二〇日制定)

年四月二十五日、J R福知山線の脱線事故で亡くなられた奥村容子さんの論文です。熱心に取り組んでこられた古代エジプト史にかかわる卒業論文を読むことはかないませんが、彼女もまた京都女子大学史学科の「卒業生」であったことを銘記したいと思えます。ご冥福をお祈りします。

本文校正中の一月二日、大学院で日本近現代史の授業を御担当いただいた京都大学大学院文学研究科の高橋秀直先生の訃報に接しました。つつしんでご冥福をお祈りいたします。

(史学科主任・松井嘉徳)

学会委員

二〇〇五年度の学会運営に協力して下さった学会委員は次の方々でした。例年通り史学会諸行事の企画から運営まで、全般に渡って支えていただきました。篤くお礼申し上げます。

- 委員長 日本史三回生 西川 真由
- 副委員長 西洋史三回生 林 桃子
- 書記 日本史三回生 佐々木瑞穂
- 書記 日本史三回生 永田かが里
- 広報 西洋史三回生 越野 綾
- 日本史二回生 岡 真由子
- 西洋史二回生 北野 里奈
- 日本史二回生 寺内 裕香
- 東洋史二回生 久門 和子
- 日本史二回生 村上 沙織
- 一回生 佐藤 友里
- 一回生 田中小百合
- 一回生 平田悠里子
- 一回生 山根亜優美
- 一回生 吉田 智子

(事業費) 本会の事業費は、京都女子大学学会・機関誌刊行経費、その他をもってこれに当てる。

(会則の改廃) 第十條 この会則の改廃は、総会の議決を経て実施する。

附則 この会則は、二〇〇三年四月一日より施行する。

『史窓』に関する規約

(二〇〇三年三月二〇日制定)

第一條 京都女子大学史学会(以下「本会」という)は、機関誌として『史窓』(以下「本誌」という)を刊行する。

第二條 本誌への投稿資格者は、本会会員および『史窓』編集委員会が特に認めた者とする。

第三條 原稿は、未発表のものに限る。

第四條 本誌に掲載された作品の著作権は、本会に属する。

第五條 執筆要項などの細則は、別に定める。

第六條 この規約の改廃は、編集委員会の議決を経て、総会の承認を得て実施する。

附則 この規約は、二〇〇三年四月一日より施行する。

(名称) 本会は、京都女子大学史学会と称する。

(事務局) 本会の事務局は、京都女子大学文学部史学研究室に置く。

(目的) 本会は、史学に関する諸問題を研究し、もつて学界に寄与することを目的とする。

(会員) 本会は、京都女子大学文学部史学科の専任教員および本会が特に認めた者をもって組織する。

(事業) 本会は、第三條の目的を達成するために、次の事業を行なう。

1 機関誌『史窓』の発行。

2 講演会、研究発表会。

3 その他必要な事業。

(代表) 本会に代表を一名置く。代表は会員の中から互選し、任期は一年間とする。ただし、再任を妨げない。

(委員会) 第七條 『史窓』の発行のために、『史窓』編集委員会を置く。委員は会員の中から互選し、任期は一年間とする。ただし、再任を妨げない。その構成員は以下のとおりとする。

- 1 編集委員長 一名
- 2 編集委員 若干名

(総会) 第八條 本会の総会は、一年に一回以上開催し、本会の重要事項を議決する。

編集後記

「節目」としての二〇〇五年、あるいは埋め草としての拡大版編集後記——

二〇〇五年(度)は、京都女子大学史学科にとつて大きな転換年になりました。四人の先生方をお送りし、新たに三人の諸先生を迎えることになるからです。いずれの先生も、ご退職される方々より年少ですから、史学科スタッフの平均年齢が大々にあるいはかなり、若返ることになります。稲本先生以外のお三方はいずれも、契約教授として着任されましたから、すでに古希を超えておられます。失礼ながら、そのお年の割りにはずいぶんお元気だと感じします。古賀先生はそのうえに、図書館長という要職も勤められました。が、さすがに、聴力その他の機能が衰えた由、仄聞しております。長いあいだ、お疲れ様でした。諸先生には、今後は健康に留意され、マイ・ペースで研究に従事されることを、心の底から願う次第です。

本号には、退職される諸先生の履歴・業績表を収録しましたが、稲本紀昭先生のそれだけが掲載されておりません。この間の事情を説明しておく必要があるかと存じます。もちろん、稲本先生にも作成方がお願いいたしました。が、「かつてそのような前例はなかった」と固辞されました。前例主義というものは、決して生産的な態度ではないと個人的には思います。先生が以前に提出された履歴書等を参照して、編集部で作成することも可能でしたが、個人情報部の責任で作成することも判断して断念いたしました。歴史研究に携わる者としては、最低限の自分史を提供する義務があると思えます。非常に残念なことではあります。

だから、編集子が記憶している範囲で、稲本先生の略歴を記しておきます。一九八八年に史学科に教授として着任された先生は、今年度まで十八年におたつて、主として日本中世史の領域で教育・研究に携わってこられました。この間に、資料紹介や資料

批判の—ある意味では、孤独な作業の—成果を学術誌に投稿され、書籍の形で公開されています(本号にも、他の退職される諸先生とともに、玉稿をいただけることになっておりましたが、「書けない」との理由で投稿を辞退されました。稲本先生らしいことではあります。ある意味では、これもまた残念なことかも知れません)。最近は入学希望者がおりませんが、中世史を専攻する大学院学生も数多く指導されてきました。

新しく赴任される諸先生については、来年度の『史窓』その他で詳しく紹介されるはずですし、現時点ではお名前など明らかにするべきではありませんから、詳述は控えますが、日本中世史、西洋古代史、西洋中世史をそれぞれ専攻されていることは、お知らせしておきます。いずれの先生も、ご退職される諸先生と同じく、研究・教育に熱心な、学生の指導に情熱をもってあたられる方々です。学生の皆さんにはぜひ積極的に、講義や講読・演習を受講してほしいものです。講読・演習はともかく、講義に関しては、受講資格がなくても(すでに、概論や特殊の所定単位を取っていても)、担当教員の許可があれば受けることができます。最新の研究成果を大いに吸収してください。

今年度は、四年ぶりか五年ぶりか、いずれにせよ久々に、一年生の専攻分けて東洋史志望学生が西洋史志望学生を上回りました。西洋史担当教員が二名も退職することがその一因とも考えられます(とうことは、残る一人にカリスマがなかったということか)。があるいは、歴史学を専攻する学生の志向・嗜好の変化が反映されている可能性もあります。本学史学科は、東洋史学科として始まり、その長い歴史を誇ってきました。全国的に東洋史の人氣が長期的退潮傾向にあると聞きますが、本学だけはその例外になって欲しいと望みます。もっとも西洋史担当教員としては、この事態に喜んでばかりはおれません。新任教員をお二人も迎える来年には、捲土重来を期したいと考えてもいます。

もちろん、東洋史と西洋史で専攻学生の奪い合いをしようなどと、不毛なことを考えているわけではありません。両学問領域で競い合って、なんとかして、外国史を研究する学生全体を増やしたいと願っているだけです。日本人だから外国史を学ぶというのと同じくらい、日本人だから外国史を学ぶという考え方には、正当な論拠があるはずです。逆に、日本人だから日本史がわかるはずというのは、日本人だから外国史がわからないという考え方と同じくらい、非論理的な思考法です。さいわい、本学科は(手前味噌になりますが)、一年生時に日本史・東洋史・西洋史の概論を全員が受講するシステムを採用しています。新しいスタッフを得て、外国史専攻生が増加することを大いに期待しております。

この一年間にも、世界には、さまざまな出来事がありました。日本では郵政民営化をめぐって首相が衆議院解散に打って出て、自民党の大勝をもたらした。郵政改革ができなくて何が構造改革だという首相の言い分は理解できませんが、そもそも、郵政改革がどういう改革なのかについて、多くの日本人は十分に認識していないのではないかと思われ(このように書いている本人にも、よくわからない)。また、大勝を受けて自民党が提出した憲法改訂案の行方も大いに気になりますが、前回の選挙とその結果について、個人的にもっとも疑問に思われるのが参議院の対応です。衆議院解散に先立って反対票を投じた自民党の議員が、雪崩を打つように賛成派に鞍替えしたことは、もっと議論されて然るべきはずだというのが、

彼らの言い分は、衆議院議員選挙によって明示された民意に従うというものですが、これはまったくおかしい。二院制を採用する議会においては、上院(日本では参議院)の役割は、下院(衆議院)の「暴走」を阻止することであり、民意がどうであろうと、自らの良識に従うことが彼らの義務だったはず。その義務を放棄し、選挙後の政局に取り残されまいとの判断からのみ行動した彼らは、自民党議

員がよく使う言い回しを借用するなら、「憲政の常道にもとる」存在以外の何物でもない。憲法改定論議とともに、参議院の存在意義に疑問を投じさせたこの愚行は、日本の政治史における大きな転換点として記憶されることになるでしょう。

イラクでは曲がりなりにも憲法が制定され、拙文を書いている時点(二〇〇五年十二月十七日)で国会議員選挙が行われていますが、相変わらずテロ活動は終息の兆しさえ見せてはいません。その一方の張本人であるアメリカのブッシュ大統領は、数日前の演説で、間違った情報に基づいて対イラク戦争を開始したことを公式に認めましたが、結果(サダム・フセインの失墜)は間違いいではなかったと強弁しました。前提が間違っているにもかかわらず、結果が正しいということは、論理的にはありえない。現実には理屈どおりには行かないという反論は、不毛なものでしょう。政治は言論による説得、つまりは論理によってなされるべきことは、アメリカの歴代大統領、少なくともましな大統領たちが一貫して強調してきたところだからです。実践したかどうかは別にして。

チェイニー副大統領だのラムズフェルド国防長官だのといった政府高官が、私的利益を国益よりも優先させていることを問題視する議論もあります。それはそのかぎり、正しい指摘なのでしょうが、だとしたら、現在のアメリカ政府は、腐敗の窮みに達して、自壊的に滅びていった中国歴代王朝の末期に非常によく似た状態にあるのでしょうか。今の合衆国の体制が農民反乱で覆されるとは、まさかと思えません。同国の歴史始まって以来の、少なくとも(南北戦争とか大不況、ベトナム戦争などに匹敵する)あるいはそれ以上の、何度目かの危機的状況に直面していることに、疑問の余地はないでしょう。自浄能力を失った政体や国民・国家の運命をアメリカだけが免れろという保証は、どこにもありません。残念なのは、これこそ、アメリカ史上空前の事態ですが、そのような現状を批判する勢力が——対立

政党であれ、リベラルやインテリであれ、マスコミであれ——ほとんど存在していないことです。この点については、日本も大同小異と言わざるをえませんが、太平洋を挟む両国民が政府に全幅の信頼を寄せている結果ではないことに、つまり、政治そのものへの根本的な不信感が両国首脳の元気の源であることに、大きな懸念や恐怖をさえ感じないではおれません。この点については、他人事のような発言は決して許されませんが、自戒を込めての発言ということになりませんが、かつて日本の「軍事大国化」が論じられたとき、「この道はいつかきた道」という不穏な表現が用いられました。今ならまだ引き返せるはずですが。

健康・衛生面に目を転ずれば、サーズはどうやら一段落したようですが、鳥インフルエンザの猛威は、いっこうに衰える気配を見せません。非常勤講師の田中俊明先生は、安南都護府跡地を見学しベトナムに旅行されましたが、鶏肉料理はいっさい出なかったと話しておられました。今年度の公開講座で登壇された井口和起先生は、その直前、中国に調査旅行に出かけられましたが、旅立つ前に、奥さんから「行くのはよいが、帰国してからしばらくは家に帰ってくるな」と命じられたそうです。他国からの伝染病到来を防止する制度、検疫は英語で quarantine といいます。この語の原義は四〇〇で、外国船内で伝染病が発生した場合、四〇日間、船員に上陸が許可されなかったという故事に由来しますから、井口先生令夫人のご命令は、歴史的にも由緒正しい(?)対処法といえるでしょう。

HIV がまったく謎の伝染病として人類の前に立ち上がった——ニューヨークの病院では、医者や看護婦が病室への立入りや拒絶したため、患者が文字通り、放置されているという衝撃的な映像がテレビで放映されたことがあった——とき、某国秘密機関が病原菌を作り出したのではないかと噂も流れました。鳥インフルエンザにもそんな可能性があるのではないかと、ついつい考えたくなります。第一

次大戦直後に猛威を振るい、日本ではスペイン風邪として知られる——北杜夫の大河小説、『楡家の人々』でも言及されている——インフルエンザは、少なくとも二〇〇〇万人を殺したとされています。ある時期まで、ただの風邪だと考えられていたため、正式な統計が残っていない、インドだけでこれくらいの人間が死んだとの推測もあるほどです。

この人類史上、希なほど凶悪だった伝染病に関して、天文学者でSF作家でもあったフレッド・ホイルは、宇宙から襲来した新種のウイルスに起因するとの仮説を提唱しました——インフルエンザという言葉そのものが、他の天体の「影響」を想定して造られたものだから、それを踏まえての説明法でもあったでしょうが——から、あながち、突拍子もない説明法ではないでしょう。その一方で、すべての病気を克服できるなどと考えるのは、傲慢な思い込みすぎない。患者の道義的責任を云々するつもりは毛頭ありませんが、HIVにしても、鳥インフルエンザにしても、自然破壊を繰り返してきた人類に天が下した鉄槌ではないかと、運命論的な考え方に陥りたくもなりません。

かつて、地球を一個の生命体として捉え、すべての生物を細胞になぞらえる考え方が提唱されたことがあります。(自然)科学的にはともかく、常識的・感覚的には納得できる見方でしょう。この立場を過度に強調して、神秘主義に陥る愚は避けるべきですが、従来の生活法に固執し続けるなら、人類は、ガイアにとつての癌細胞でしかないし、あるいは、いずれ摘出される運命に見舞われるかもしれない。たとえば、地球温暖化が化石燃料の大量消費に由来するという指摘を、アラミスト(いたずらに騒いで恐怖をかき立てる人・立場)のとして却下する科学者も、依然として存在していますが、昨今の異常気象に鑑みるに、能天気なまでに楽観主義的な、ないしは悪意を底に秘めた保証としか思えません。

史学科にとつての「節目」の強調で始まった編集後記が、「エレミアの嘆き」で終わることになりま

した。二〇〇六年は、地球や全人類にとって、もう少しましなものになってほしいと切望する次第です。とりわけ『史窓』のような雑誌の場合、編集後記で編集担当員が雑感をあれこれ、とりとめもなく綴るといふのは、決してよい趣味ではありません。しかしながら、今年度から来年度にかけて大幅なスタッフの交替が生じること、予定していた原稿が集まらず、誌面に多少の空きが生じたこと、ここ数年、編集後記を担当してきた常松が今号を最後に（少なくとも、しばらくは）その役割を終えることなどから、拡大版になってしまいました。ご了承のほど、お願います次第です。
(常松 洋)

執筆者紹介

水谷 友紀 京都府立大学大学院

文学研究科博士後期課程

新田 一郎 本学教授

古賀 秀男 本学教授

中村 泰三 本学教授

(掲載順)

編集委員

常松 洋 (委員長)

母利 美和

谷口 淳一

史窓 第63号

二〇〇六年二月三日 印刷
二〇〇六年二月十日 発行

編集 『史窓』編集委員会

発行 京都女子大学史学会

京都市東山区今熊野北日吉町三五

京都女子大学文学部史学研究室内

☎(〇七五)五三一―九一一

代表者 松井 嘉徳

印刷 株式会社印刷同朋舎

京都市下京区中堂寺鍵田町二

☎(〇七五)三六一―九一二

※掲載内容の著作権は、京都女子大学史学会に帰属
します。

KYOTO WOMEN'S UNIVERSITY

Journal of Historical Studies

SHISŌ

Vol. 63

February 2006

Contents

Articles

- MIZUTANI Yuki, *Gōsho* 号所 at *Nara machi* 奈良町 in Early Modern Japan····(1)
- NITTA Ichirō, Constantine and Christianity:Especially on His Battle against Maxentius ·····(25)
- KOGA Hideo, On Recent Chartist Studies: The 150th Anniversary of the Land Scheme and Its After ·····(41)
- NAKAMURA Taizō, On Some Characters of Placenames in Russia ····(61)

Document

- Shimogamo Shake Nikki Kenkyūkai, The Catalogue of *Shimogamo Shake Nikki Shihai Monjo* 下鴨社家日記紙背文書 ·····(69)

Biographical Notes and Lists of Works

- NITTA Ichirō ·····(123)
- KOGA Hideo ·····(129)
- NAKAMURA Taizō ·····(135)

In Memoriam OKUMURA Yōko ·····(145)

Miscellanea ·····(153)

THE ASSOCIATION OF HISTORICAL STUDIES

Kyoto Women's University, Kyoto, Japan

ISSN 0386-8931